

日本航空株式会社所属
ボーイング式747-200B型JA8111
に関する航空事故報告書

昭和55年3月26日

航空事故調査委員会議決（空委第15号）

委 員 長	八 田 桂 三
委 員	榎 本 善 臣
委 員	諏 訪 勝 義
委 員	小 一 原 正
委 員	幸 尾 治 朗

1 航空事故調査の経過

1.1 航空事故の概要

日本航空株式会社所属ボーイング式747-200B型JA8111は、昭和55年1月27日、同社の定期404便として、アムステルダム・スキポール空港を出発し、アンカレッジ国際空港に向け飛行中、旅客1名（男性49才）が病死した。

1.2 航空事故調査の概要

昭和55年1月29日 事実調査

1.3 原因関係者からの意見聴取

昭和55年3月19日 意見聴取

281001

2 認定した事実及び認定した理由

J A 8 1 1 1 は、昭和 5 5 年 1 月 2 6 日 2 3 時 1 8 分（日本標準時。以下同じ。）、旅客 2 7 1 名、乗組員 1 8 名（運航乗務員 3 名、客室乗務員 1 5 名）がとう乗し、アムステルダム・スキポール空港を離陸し、巡航高度 3 5. 0 0 0 フィートでアンカレッジ国際空港に向け飛行中、2 7 日 0 2 時 2 7 分ごろ旅客の 1 名（日本国籍）が鼻血を出したので、客室乗務員は、止血の処置を行って横臥させた。その後、当該旅客の容態が急変したので、客室乗務員は、機長に報告するとともに酸素吸入を行い、2 名の旅客の援助を得て応急手当を続行した。その後、当該旅客は、口から大量の出血をし意識不明となり、0 5 時 5 5 分ごろ（北緯 7 4 度 5 0 分、西経 1 2 7 度 0 0 分の公海上空）、呼吸、脈及び心音の確認ができない状態となった。

同機は、0 8 時 0 5 分、アンカレッジ国際空港に着陸した。

米国検死官の検死の結果、当該旅客の死亡原因は、「肝硬変による食道静脈瘤破裂」であった。

3 結 論

原 因

本事故は、飛行中に旅客が「肝硬変による食道静脈瘤破裂」により死亡したことによるものと認められる。

281002